◇ 国　語

国 3－1～国 3－18 まで 18 ページあります。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

詩は言葉でできていて、言葉にはもれなく意味があるので、私たちはどうしても書いてある意味をわかろうとしながら読むことになります。学校教育を通して単語や文章の意味を理解する訓練を積み、内容をテキ[A]カクに読み取らなければならないと刷り込まれているのも大きい。ところが、詩は知っている言葉で書かれているはずなのに意味がとれなかったりするから、自分には詩は読めない、難しい……と遠ざけたくなるのも想像に難くありません。

でも、仕事の連絡やニュースも含めた日常での言葉のやりとりと違い、詩は必ずしも意味がわからなくてもいいのです。教科書で読む文章というより、どちらかというと美術や音楽に触れる感覚で近づいてみてください。絵に描かれているのが何なのか、どういうテーマの曲なのか、頭で理解すればそれでおしまいというわけではないのと同じ。よくわからないのに引き込まれることがあるのと同じ。意味を理解できなくても、文字の並びや言葉の響きが素敵で美しさやカッコよさを感じたりする。理屈ではない部分で揺り動かされることを、まずは恐れないでください。（そのあと、どうしてそう感じたかを考えることは必要ですが。）(二)詩を読むことは一種の体験です。読む前の自分とは何かが決定的に変わった、というような体験をしたとしたら、力のある詩に出会ったということです。

詩の読み方に正解はありません。わからなくてもかまわない、こうだろうかああだろうかと自由に想像力を働かせ、言葉の世界で遊ぶように楽しめたなら、何よりです。詩は、作者が書き終わったら完成というのではなく、読んだ人それぞれの胸のうちで完成していくのだと私は考えます。背景や物語を想像し、二次創作的な読み方をしてもかまわない（作者にそれを伝えてしまうと微妙な反応がかえってくる場合はあるかもしれませんけれども。）詩を読むというのは、それ自体が創造的な行為です。日常的な理解の仕方を逸脱したところで使われている言葉を、自分なりに咀嚼[a](そしゃく)して味わう体験は、現実を生きる感覚を少しだけ拡張するでしょう。普段は意味を伝える道具として固定的に使っている言葉の感触も、変わってくるでしょう。

もちろん、理解したいと考えるのは人の自然な欲求です。ただ、現代はそれを急ぎすぎる傾向がある。「ひとことで言って」「簡

単にわかりやすく説明して」というような圧が、常に感じられます。資本主義社会では［　ア　］が経済的な価値になるから仕方ないとはいえ、すぐにわかりたい、わかったらそれはもう終わったことにして早く次に行きたい、と急ぐばかりで、社会も私たちも疲弊(b)し薄っぺらになっていく気がします。詩はむしろ、結論を出すことを急がず、わかることを先延ばしにし、一つではないかもしれないし無いかもしれない答えに向かって繰り返し投げかけられる問いのような言葉。そういう言葉に触れることで、目の前の現実だけではない世界のあり方を探るのは、大事なことではないでしょうか。

手っ取り早くわかろうとするのは、対象をこちらの持っている物差しで測ってキソン(B)の容れ物に収容しようとする行為に似て、ちょっと［　イ　］でもあります。物差しを新しくするとか、今までになかった容れ物を想像するとか、そんなこともできるはず。詩を読むのは、攻略すべき問題に立ち向かうことではなく、誰かと出会って知り合っていくようなものです。他人は（あるいは自分自身も）わかりやすくはないし、簡単にラベリング(注一)できないけれど、あれこれ考えながらつきあっていくうちに意外な楽しさが生じたり、自分が変わったり、知らなかった世界が広がったりすることがあるからおもしろいのだと思います。

では、詩を書くには何をどんなふうに始めればいいか。

前述したようにきまりはありませんから、好きに書けばいい……のですが、それがかえって難しいのかもしれません。

書きたいことがあれば、迷わずそれを書きましょう。こんな題材が詩になるだろうか、とか考えなくていいです。書き手が「これは詩だ」と思って書いたならそれは詩なので、あとで誰かに「これは詩じゃない」と言われたとしても気にしないで（詩としてうまくいったかどうかは、気にするところですが）。大事なのは、既にどこかにあるような言いまわしを借りてきて自分の書きたい内容をそこに当てはめることで楽をしようとしないこと。言葉は思考を司りますから、それだと自分自身を先へ推し進めることはできないし、だいいち楽しくない。また、あらかじめ書く内容をかっちり決めすぎていると、言葉がそれを言い表すための道具としてだけ使われることになりがちなので、構えはできるだけジュウナン(c)に。言葉と言葉の連なりからは、作者も予想しなかったイメージや展開が生まれることがありますから、それを大切にしてほしいと思います。

書きたいことはあるような気がするけどぼんやりしている、あるいは書きたいことが思い浮かばない（けれど詩を書いてみた

い）という場合は、気楽に単語をメモするところから始めてみてください。「好きなもの」とか「今日あったこと」とか、適当なテーマで、マインドマップ作りみたいに大きめの紙に思いつくまま記しましょう。連想をつなげていってもいい。言葉の準備体操です。日常の中で気になった単語や思いついたフレーズを書き留めるノートを持つのもおすすめ。そういえば私は会社勤めをしていた頃、自分が詩に書いたことのない言葉を見つけてはメモしていた時期がありました。「為替」とか「鼻血」とか。何かしらのアンテナをたてると引っかかってくる言葉があり、そこからじわじわ想像が広がっていったりします。

記した言葉を積み木か絵の具のように見立て、好みの感じに並べ替えるだけで、詩の原型ができます。それを読み返すと、もしかして自分はこんなことを考えていたのかなとか、物語の場面みたいだなとか、見えてくるものがきっとある。それを手がかりに言葉を足したり引いたり、自由にかたちを作っていきましょう。書くことと読むこと、読むことと書くことは、想像以上に地続き。言葉と向きあうのは集中力が要りますが、楽しいです。楽しいだけではすまなくなるときがやがてくるかもしれませんが、まずは書くことを楽しみましょう。

詩は、詩らしく（文学的に？）しなくてはいけない、何らかのメッセージがなくてはいけない、と考える人もいますが、そうでなくても全然かまいません。結果的に、何かが伝わる詩になるかもしれない。やってみなければわからない。個人的には、だめだめな詩もまたよし、と思っています。だってこの現実には役立つことのない詩が、誰に強いられたわけでもないのに次々に生み出され、たくさん存在する世界って、素敵でツウカイじゃありませんか。ポエム上等、です。それに、どんなジャンルでも、無数の駄作があるからこそ稀（まれ）に素晴らしい作品が生まれるのです。

書いた先のこと、読み手にどう受けとめられるかは悩ましい問題。そもそも言葉で書くのだから、他人（数時間後の自分だってある意味他人です。）に読まれることを想定しています。わかってもらいたい部分がしっかり伝わるよう工夫し推敲（すいこう）するのは重要ですが、自分の書きたいように書くということを曲げてまでわかりやすくしなくたっていい。そのバランスをどうとるかは詩人それぞれなので、書きながらつかんでいくしかありません。

繰り返しますが、詩はわからなくてもいいのです。そもそも、いくら言葉という共有のツールを使ったにしても自分の頭の中

にあることをそのまま完璧に伝えることは不可能。だったら表現することは無意味かというと、そうではありません。読み手の中に新たな何かを生じさせることがあるから、詩というかたちにして投げかけるのは（そして、受けとめるのは）どきどきするおもしろさがあるのです。

また、詩は自分でもわかっていないことを、わからないまま表現することが可能です。書くことによって作者自身が初めて気づくこともある。そして、わかられたくないことを（わかろうとすることは時に［イ］なので）、わかられないように表現することだって、詩ならできます。

何事もそうでしょうが、書き続け、積み上げたからこそ至れる場所があります。地道に続けること、大事です。続けるためには、思いついたときにだけ書くのではなく、定期的に書く、書くことが当たり前になる習慣あるいは筋肉をつけること。定期刊行の個人誌や同人誌を作って〆切を設ける、新人欄へのトウコウ[E]を宿題にするなど、やり方はいろいろあると思います。読んでくれる誰か、言葉を届ける先を想像できるようにしておくといいと思います。そうして自分の中に「読者」[注一]を育てられたら、書きたいように書くことと、伝えようとすることのバランスが、とりやすくなるでしょう。

書いた先のことを意識し始めると、評価が気にかかってくるかもしれません。褒められたい、できれば賞などもらいたい、と願ってしまうのは自然です。だけど、それに振り回されると病みます。そういうときは［ウ］、です。なぜ詩に惹かれたのか。評価されることが目的で詩を書き始めたのではなかったはず。結果的に評価されればもちろん嬉しい、励みにもなる、でもそれはおまけのようなもの。だいたい詩は、現実のヒエラルキー[注二]とは無縁に存在しているのですから。

（川口晴美「世界と出会うための地図」による）

（注一）ラベリング　もとはラベルを貼ること。人物や物事について、ある評価をして、そうと決めつけること

（注二）ヒエラルキー　上下の階層秩序を持つ組織構造のこと

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　テキカク

①大胆フテキな行動をする　②港町にキテキが響く
③文章から要点をテキシュツする　④彼には芸術テキなセンスがある
⑤蛇口からスイテキが落ちている

1

B　キソン

①会社に大きなソンガイを与える　②山の向こうのソンラクを尋ねる
③彼は恥ずかしげにケンソンした　④恩師のソンガンを久々に拝する
⑤その決定にイゾンはありません

2

C　ジュウナン

①妹はナンシキ野球の選手だ　②ガーゼをナンマイも重ねる
③先生に練習法をシナンしていただく　④兄弟のなかで弟はサンナンにあたる
⑤ナンコウフラクの高い山に挑戦する

3

D　ツウカイ

①カイキ現象にあって怖くなる　②優勝はカイキョと報じられた
③フカカイな出来事に頭を抱える　④梅田カイワイを友人と散歩する
⑤けが人を手厚くカイホウする

4

E　トウコウ

①印刷をする前に最後のコウセイをする　②暗夜に一筋のコウミョウを見いだした
③母親は勉強熱心なコウガク者といえる　④彼女はスウコウな目的を持っている
⑤クラスの文集に先生がキコウしてくれた

5

問二　空欄 ア ・ イ ・ ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。
イ は二カ所あるが、同じものが入る。

ア　6
①知力と体力　②速さと効率　③圧縮と展開
④進化と発展　⑤財産と名声

イ　7
①理論的　②好戦的　③友好的
④急進的　⑤暴力的

ウ　8
①入り口に戻れ　②一見にしかず　③自分を信じる
④目標を念じろ　⑤果報は寝て待て

問三　傍線部（a）・（b）・（c）の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（a）咀嚼　9
①作者の意図を正確に計測すること　②ノートなどに詩の文句を写すこと
③難解な語は辞書などで調べること　④詩の主題を理知的に理解すること
⑤語句を丁寧に読み取り味わうこと

（b）疲弊

①心や身体などがくたびれて弱ること
②仕事などが忙しいことで心的に焦ること
③精神的に困惑して考えが定まらないこと
④目標を失って何かに挑戦する気が失われること
⑤経済的に困窮しやりたいことができなくなること

10

（c）推敲

①詩や文章を作る際、使用する字句や表現を何度も練り直すこと
②詩や文章を作る際、作品の中心的なメッセージが何か自分の考えを定めること
③詩や文章を作る際、自分の表現したいイメージの腹案を練ること
④詩や文章を作る際、文学として高いレベルの作品になるよう表現を改めること
⑤詩や文章を作る際、尊敬する先生や先輩のアドバイスを仰ぐこと

11

問四　傍線部（一）「詩を読むことは一種の体験です」とあるが、その体験とはどういうことか。関連する内容として当てはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

①詩を読むことで自分自身が変わったり、知らなかった世界が広がったりすること。
②詩のなかの文字の並びや言葉の響きなどに、かっこよさや美しさなどを感じること。
③詩の意味や内容を正確に理解することを目指して、辞書を引いて単語を調べること。
④普段から見慣れていた言葉の感触が、その詩を読むことで変わって感じられたこと。

問五　傍線部（二）「自分の中に「読者」を育てられたら」とあるが、このことは作者にとってどのような意味を持つか。その内容を説明したもので、もっとも適当なものはどれか。次の①～④の中から一つ選べ。

13

①読者の厳しい批評があることも想定しつつ作品を作ることで、表現を繊細にすることができる。
②詩を読まない人々が社会には多いという現状をふまえることで、平易な言葉で詩を作成できる。
③詩を読んでくれるだろう読者を想定しておくことで、作品表現を工夫し調整することができる。
④詩の面白さを多くの読者に伝えるという目標を持つことで、多数の高評価を得ることができる。

問六　傍線部（三）「詩は、現実のヒエラルキーとは無縁に存在している」とあるが、これに関連する内容を説明したもので、もっとも適当なものはどれか。次の①～④の中から一つ選べ。

14

①詩はそれ自体が社会的なメッセージを内包しているため、あらためて現実の社会構造を視野に入れる必要がないこと。
②詩は現実のヒエラルキーをあえて無視することで、逆に美術や音楽のような影響力を多くの人々に与えてきたこと。
③詩は学校教育などの機会を通じて人々に教えられるが、その後もそれを学び続ける人はとても少ないということ。
④詩は現実的に役立つことがほとんどなく、はじめから社会の秩序やそのなかでの評価とは関係なく存在していること。

問七　本文の内容と一致するものはどれか。次の①～④の中から最も適当なものを一つ選べ。

①詩を書くためには既に社会に流通している言いまわしをなるべく多く覚える必要がある。
②詩の言葉相互の連なりから作者も予想しなかったイメージや展開が生まれることがある。
③優れた詩人ならば自分が思い描いたイメージを全くそのまま読者に伝えることができる。
④良い読者になるためには詩の意味を人にわかりやすく説明できるかどうかが重要である。

15

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ヒトは獣を狩り、家畜を解体し、肉を食らう。鳥を撃ち、魚を突く。たとえ菜食主義者を(a)標榜(ひょうぼう)しても、植物が時間をかけてその葉や根、実に貯蔵したタンパク質をA[シュウ]ダツし、それを口にせざるを得ない。

私たちが食物として口に入れるものは、肉にしろ、穀物にしろ、果実にしろ、すべて元はと言えば他の生物の身体の一部であったものだ。なぜ、私たちは他の生命を奪ってまで、タンパク質を摂り続けなければならないのだろうか。

タンパク質には、元の生命体を構成していたときの情報がぎっしり書き込まれている。ここで言う情報とは、具体的に言えば、タンパク質の構造のことである。このタンパク質の構造情報が生命の機能を支えている。

タンパク質とは、アミノ酸がいくつも連結した高分子化合物である。生体を構成するアミノ酸は二〇種あり、その組み合わせが「情報」となる。このためタンパク質の種類は数千万種と言われている。

では、タンパク質の［　ア　］、つまり「消化」とはいったい何を意味するのだろうか。肉や植物に含まれるタンパク質は、食いちぎられ、咀嚼(そしゃく)され、消化管に送り込まれる。そこで消化酵素によって分解を受ける。タンパク質はその構成要素であるアミノ酸に分解される。

もし、他の生物のタンパク質がそのまま私たちの身体の内部に取り込まれれば、どうなるのだろうか。［　イ　］、他者の情報は、私たち自身の情報と衝突し、B[カン]ショウし合い、さまざまなトラブルが引き起こされる。アレルギー反応やアトピー、あるいは炎症や拒絶反応とは、すべてそのような生体情報同士のぶつかり合いのことである。

そこで、生命体は口に入れた食物をいったん粉々に分解することによって、そこに内包されていた他者の情報を解体する。これが消化である。

消化とは、腹ごなれがいいように食物を小さく砕くことがその機能の本質では決してなく、情報を解体することに(一)本当の意味がある。タンパク質は、消化酵素によって、その構成単位つまりアミノ酸にまで分解されてから吸収される。

タンパク質が「文章」だとすれば、アミノ酸は文を構成する「アルファベット」に相当する。「I LOVE YOU」という文は、

一文字ずつ、I、L、O、V……という具合に分解され、それまで持っていた情報をいったん失う。

今、ここにアメ玉が一個あります。このアメ玉をあなたに差し上げます。あなたはそれを指でつまんで口に入れました。アメ玉はあなたの体内に入ったのでしょうか？

アメ玉はあなたの口の中でしゃぶられ、唾液に溶けました。アメの溶液は食道を通って胃に流れ込みました。アメはあなたの体内に入ったのでしょうか？

いいえ、まだ、アメはあなたの体内に入ってはいません。

消化管の内部は、一般的には「体内」と言われているが、生物学的には体内ではない。つまり体外である。

人間の消化管は、口、食道、胃、小腸、大腸、肛門（こうもん）と連なって、身体の中を通っているが、［ウ］には外部と繋がっている。それはチクワの穴のようなもの、つまり身体の中心を突き抜ける中空の管（くだ）である。

だから、私たちが食べたものは、口から入り胃や腸に達するが、(二)この時点ではまだ本当の意味では体内に入ったわけではない。まだ私たちの身体の「外側」にあるのだ。

では、いつから食べ物は「体内に入った」ことになるのか。それは、消化管内で消化され、低分子化された栄養素が消化管壁を透過して体内の血液中に入ったときである。そのとき、初めて食べ物は身体の「内部」、すなわちチクワの身の部分に入ったことになる。

他の生物の身体である食物――つまりタンパク質をそのまま体内に入れてしまうと、他者の情報が、私たち自身の情報と衝突し、カンショウし合い、トラブルが引き起こるから、情報を一文字（アミノ酸）にまで解体する、それが消化である。

だから、消化されていない食べ物は、胃の中にあっても、まだ「体外」にあるのと同じ。つまり、胃の中は「体外」なのである。

これは、受精卵が細胞分裂を繰り返し、胚（はい）となり、胎児に成長していく過程を観察するとよく理解できる。いくつもの細胞の塊（かたまり）となった胚は次第に中空のボール状に形を変えていく。その後、ボールの皮が陥入し、反対側に達する。皮と皮がユウ(c)ゴウして

穴をつくる。するとボールの中にトンネル様の筒が貫通したことになる。その筒の中が消化管の中になる。

単純化すれば、人間の身体はチクワのような中空の管にすぎず、その他の穴はチクワの表面にあいた穴や窪(くぼ)みでしかないことになる。

その成り立ちをよく考えてみると、子宮もまったく同様に、それが身体の外部であるとわかる。子宮は皮膚の一部が内側に陥入してできた袋である。その袋に、種が迷い込み、袋の奥深くに安置されていたもう一つの種とユウゴウしたとき受精卵ができる。

受精卵が発生し、胚となり、赤ちゃんとなる間、そこは外的環境から守られてはいるものの、厳密な意味での身体内部ではなく、いわばポケットのような場所なのである。

なかなかそうは思えないけれど、実は、人間の身体にあいている穴はすべて一種の袋小路であり、本当の内部ではない。耳の穴もそうだし、尿道もそうである。汗腺や涙腺のように体液が出てくる穴も、その穴に周囲の壁から液がにじみ出てくるだけで、その穴の底は閉じている。

だから、私たちは「お腹(なか)が痛い」と言うときの「お腹」を、自分の身体の内部のように思っているが、生物学的にはそうではない。

「お腹に赤ちゃんがいる」と言うときの「お腹」も母親の体内ではない。(三)消化管の内部も、子宮の内部も、実は身体にとっては外部なのである。

そもそも、私たちの遠い遠い祖先は、現在のミミズやナメクジのような存在だった。彼らの姿こそが、私たちの原形なのである。彼らはまさに一本の管。口と肛門があり、そのあいだを中空のチューブが貫いている。

ミミズにもわずかに目の原形のようなものがあり、進む向きがあり、土を食べる側があるので、かろうじてどちらが口で、どちらが肛門かが判別できる。まだ、脳と呼ぶべき中枢(b)の場所は定かではない。神経細胞は、消化管に沿ってそれを取り巻くようにはしご状のネットワークを形成しつつ分布している。

彼らは人間の消化管と同じように、緻密な蠕動運動を行って食べ物を消化・吸収し、さまざまな反応を行い、環境に適応して生きている。

[エ]、脳がないとはいえ、ミミズは、あるときは葉っぱのどちら側を咥えれば巣穴に運び込むのに都合がいいのか、迷いつつ「考え」さえしているのである。

これらの生命活動は、消化管に沿って分布する神経ネットワークによってコントロールされている。もし、彼らに「君の心はどこにあるの？」と訊ねることができ、その答えを何らかの方法で私たちがカンチ[D]することができたとすれば、彼らはきっと自分の消化管を指すことだろう。

優れた「脳」、つまり中枢神経系を持った私たちにも、消化管に沿って緻密な末梢神経系が存在している。

そして、脳で情報伝達に関わっている神経ペプチドと呼ばれるホルモンとほとんど同じものが、消化管の神経細胞でも使われていることが判明している。これらの神経ペプチドがいったいなぜこれほど多種類、大量に消化管近傍に存在するのか、そしてそれらが日々、いったい何をつかさどっているのかは未だによくわかっていないのである。

第六感のことを英語では、ガット（gut＝消化管）・フィーリングという。あるいは意志の力をガッツ（guts）と呼んだりする。「ガッツがある」と言うときのガッツである。

私たちは、もっぱら自分の思惟は脳にあり、脳がすべてをコントロールし、あらゆるリアルな感覚とバーチャルな幻想を作り出しているように思っているけれど、それは実証されたものではない。

(四) 消化管神経回路網をリトル・ブレインと呼ぶ学者もいる。しかし、それは脳と比べても全然リトルではないほど大がかりなシステムなのだ。私たちはひょっとすると、この管で考えているのかもしれないのである。

極言すれば、私たちは一度、かつてダーウィンがそうしたように、ミミズのあり方をじっくりと観察したほうがいい。そしてもう少しケン[E]キョになるべきなのだ。私たちは、たとえ進化の歴史が何億年経過しようとも、中空の管でしかないのだから。

（福岡伸一『新版　動的平衡　生命はなぜそこに宿るのか』による）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　シュウダツ

①先例をトウシュウする　②景気悪化によるゲンシュウ　③シュウジンの注目を集める　④ビルのシュウゼン費用　⑤一つのことにコシュウする

16

B　カンショウ

①このままだとイッカンの終わりだ　②物々コウカンしよう　③専門家によるカンシュウ　④証人としてショウカンされた　⑤カンチョウだと水面が低い

17

C　ユウゴウ

①キンユウ業界に就職したい　②ユウゲン実行を期待したい　③一刻のユウヨも許されない　④能の魅力はユウゲンさに尽きる　⑤ヨユウがある様子に安心した

18

D　カンチ

①シュウチ心から逃げ出した　②病気はカンチしたと聞いた　③チテキ好奇心をくすぐられる　④寝坊してチコクした　⑤万全のソチを講じる

19

E　ケンキョ

①他の業務もケンムしている　②マラソンを途中でキケンした　③ケンメイの努力が報われた　④将来のために少しケンヤクする　⑤ケンジョウ語の使い方は難しい

20

問二　空欄 ア ・ イ ・ ウ ・ エ に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中から、それぞれ一つずつ選べ。

ア　21
①摂取　②本質
③役割　④働き

イ　22
①思いがけず　②あろうことか
③当然のことながら　④しかしながら

ウ　23
①進化的　②空間的
③時空的　④全体的

エ　24
①それゆえ　②想定内だが
③意外なことに　④もっともなことだが

問三　傍線部（a）・（b）の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（a）標榜

①自分の意見や持論を他に認めさせようとして、強く言い張ること
②主義主張や自己の立場を公然と表わすこと
③実現しようとして目指すこと
④相手を納得させようとして、力を込めて述べること

25

（b）中枢

①中心となるたいせつなところ、重要な部分
②物事の根本的な性質・要素、そのものの、本来の姿
③ある限られた範囲で周囲のどこからも等しい距離にあるところ
④物事を考えるときの出発点

26

問四　傍線部（一）「本当の意味」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

①生体情報同士のぶつかり合いを活性化させること
②消化酵素によってタンパク質を分解すること
③食物に内包されていた他の生物の情報を解体すること
④他の生命のタンパク質の中からアミノ酸だけ抽出すること

27

問五　傍線部（二）「この時点ではまだ本当の意味では体内に入ったわけではない」とあるが、その理由として当てはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

28

①食道や胃などの消化管の内部は生物学的には体外であるため
②消化管はいわば身体を貫く筒であり外部と繋がっているため
③口に入った時点で、アメ玉の消化は始まっているため
④消化管の壁から体内の血液に栄養素が通り抜ける前の段階にあるため

問六　傍線部（三）「消化管の内部も、子宮の内部も、実は身体にとっては外部なのである」の説明として当てはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

①生物学的に判断すると全ての内臓は身体の外部にあるものだから
②消化管は胚の外側の皮からできた管であり、子宮は皮膚が内側に陥入してできた袋だから
③人間の身体はいわば中空の管のようなものだから
④耳の穴も毛穴も身体にあいている全ての穴は袋小路になっているから

問七　傍線部（四）「消化管神経回路網をリトル・ブレインと呼ぶ学者もいる」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から選べ。

30

①ミミズが消化管沿いの神経ネットワークで生命活動をコントロールしているかどうかわからないから
②多種類で大量の神経ペプチドが消化管の神経細胞でも使われていることが判明しているから
③脳（ブレイン）がすべてをコントロールしているとはいえ、消化管神経回路も多少は影響しているかもしれないため
④消化管神経回路網を脳（ブレイン）に比べて重要でないと考える学者は多く、そのため「リトル・ブレイン」と呼ばれているため